



一線

高橋 呼春

漆、クリ

私たちは自然を完全に制御することはできない。

だからこそ、人の意思と自然は制作過程で一体となり、作り手に新しいかたちをもたらす。

自然素材である漆と木材、そこに自分の手が呼応するように、かたちを探り、触感を求める。

そうして生まれた漆黒の鏡面は、永遠に連なる時間の中で、反射と吸収を絶えず繰り返す。

私たちが見ている実在と非実在に揺らぎを与え、境界を曖昧なものにする。

境界線を引くことで、境界を超えることは特別な行為となる。

また、境界となる場所をつくることで、二つの世界を区別しながら同時に繋ぐことが可能となる。

漆によって輝く直線は、境界となる場所である。

有機的に変化し続ける曖昧な場所を捉え、見るものは世界のかたちを把握する。